

学校法人 東京キリスト教学園
東京基督教大学
2022 年度事業報告学長総括

2022 年度は、<年間聖句>「主にふさわしく歩み、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる良いわざのうちに実を結び、を知ることにおいて成長しますように。」（コロサイ人への手紙 1 章 10 節）、<年間テーマ>「Stand in the Gap 破れ口にキリストの平和を⑤ ～キリストの身丈に～」を掲げて歩みました。すでに「第 4 期中期計画（2023～2027 年度）」及び「2023 年度事業計画」が始まっていますが、「2022 年度事業報告」を学長（2 期目の一年目）として総括しておきます。

2022 年度は、第 3 期中期計画の最終年度であり、7 年に一度の大学基準協会による大学評価の年でもありました。大学基準に適合の評価を得、学生支援（コイノニア）と社会連携（グローバル）が長所とされたことは喜ばしいことです。一方、内部質保証が改善課題とされ、財務に是正勧告がなされました。これは 2022 年度の事業報告にも当てはまることです。内部質保証についてはすでに対応を進めています。財務の是正は大学評価を待つまでもなく、30 周年の総括として確認し、昨今の状況をふまえ、危機対応の第 4 期中期計画を策定しています。

2022 年度は、新型コロナ対応 3 年目でした。全寮制に戻し、総合神学科の 2 年目、めざすところの教育・学生支援にあたりました。また次世代を担う教職員を中心としたグローバル神学の推進タスクフォースが始動しました。学生募集は 1 年次春入学が減少を続け、コロナ禍の影響だけではない課題を受け止めています。財務理事を中心に財務チームが発足し、現状分析を進めました。今後の抜本的対応のための基礎作業です。資金収支は遊休地売却と外貨建て資金の為替差益等により約 1500 万円のプラスでした。主に感謝いたします。

学長として、かけがえのない TCU の教育・学生支援、研究のため、その土台となる財政基盤の確立をめざします。教職員・理事は、学生、評議員・監事、すべてのステイクホルダーの協力をいただきながら、全力を挙げて TCU の将来を切り拓いてまいりましょう。

（補遺）第 4 期中期計画は、危機対応の計画としてグローバル神学を掲げ、教育・学生支援、研究、学生募集の各基本方針と目標をコンパクトに定め、各年度の事業計画はフレキシブルに策定することにしました。事業計画の項目を「最重点項目、教育・学生支援、学生募集、財務・キャンパス整備、ガバナンスとマネジメント、研究、教会と地域とともに」から、「教育・学生支援、研究、学生募集、財政基盤の確立、その他」に変更しています。

中期計画（2018-2022年度）		2022年度（2022年4月1日～2023年3月31日）				
		事業計画	報告	評価	改善	
最重点項目		「Stand in the Gap 破れ口にキリストの平和を」（コンセプト）の結実と振り返り	神プロにおける大学改革のコンセプト「Stand in the Gap 破れ口にキリストの平和を」を5年間にわたって掲げたことで、単年度ごとの年間テーマに比べ、学内外によく浸透した	・大学改革のコンセプトとその継続による浸透は評価できる ・結実を教育・学生支援において得る必要がある	グローバル神学の推進によって「Stand in the Gap 破れ口にキリストの平和を」の教育・学生支援における成果を上げ、学生募集にもつなげる	
		総合神学科の教育の充実と定員を充足するための募集活動の新たな展開	。学生募集はコロナ対応の制限を緩和し広がったが、1年次春入学は17名から11名に減少した（退学者は前年の10名から3名に減じた）	1年次春入学の減少は危機的である（退学者の減少は評価できる）	ポストコロナの学生募集活性化と共に、総合神学科の教育を吟味し、効果的な広報につなげる	
		「グローバル神学」推進のための体制を整えてスタートさせる	第4期中期計画を「グローバル神学」推進でまとめ、学生募集と財政基盤の確立に寄与する計画とした。そのため学長補佐をリーダーとするグローバル神学推進タスクフォースを設置した	次世代を担う教職員によりグローバル神学推進タスクフォースがスタートしたことは評価できる	「グローバル神学」の意味とめざすところについて、学内の共通理解と意欲を向上させる	
		資金の収支の改善に向けた施策の立案と実行⑤ 開学以来の収支構造の抜本的改革を進める	・財務理事を中心に財務チームを発足させ、抜本的改革の準備として、現状の分析、課題の洗い出し、具体的な対応を順次進めた ・予算編成チームによる新年度予算編成を行った ・理事会の判断のもと、資金運用委員会によって有価証券の売却・外貨建て資金の円転換を行い、利益を確保した ・大学基準協会による大学評価で適合となるも、財務は是正勧告を受けた。「実態に即した計画を策定し、財政基盤の確立に向けた取り組みを着実に実行するよう是正」する。これについては2026年度7月までに改善報告書を提出する 〔・2022年度決算における資金の収支は、予算執行による遊休土地売却収入・期中に実施した外貨建て資金の円転換為替差益等により、約1,500万円プラスである	・財務チーム発足後、財務整理と分析が進み、今後の対応策立案への準備が進んでいることは評価できる ・理事会の判断により、外貨建て資金の円転により利益を確保することができたことは評価できる	財務改善、財政基盤の確立は喫緊の課題であり、引き続き、資金調達と運用、適切な財務管理、収支構造の抜本的な改革に取り組んでいく	
1 教育・学生支援	A. キリスト教全人格教育（学修・学生生活支援）	EM（エンrollmentマネジメント）体制を構築する（A）				
	・ 部署横断的な組織新設	1	学務会議で学生支援について中心的に対応することができている	学務会議で学生支援への対応を中心に据えることができていない	学生支援を中心に据えていても、新たな課題は次々に出てきて、これで十分ということにはならない	続けて学生支援についての対応を学務会議の中心に据える
	・ 包括的な学生生活のバランスの実現	2	教授会における学生支援に関する意見交換を充実する	学長主導のもとに、教授会で学生支援に関する意見交換の機会を適宜設けている	学生支援に関する教授会での意見交換はできていない	教授会での意見交換から出てきた課題の解決を、次の学務会議で検討するようにする
	・ 有機的な学生ポートフォリオ構築	3	初年次・二年次、各専攻グループの教職協働体制を整備する	学部長付きのタスクフォースを作り、初年次・二年次から各専攻グループでの学生支援の検討を教職協同で行った	この働きにおける教職協働体制はほぼできている	2023年度から5つの専攻グループの教職協働体制が順調にスタートできていくかに注意する
	・ 寮教育の本質検討と実践	4	教務部と学生部の協働体制を整備する	学長のリーダーシップのもとで、教務部と学生部の協働体制作りに取り組み始めている	すぐに実現できるものではないが、徐々に体制作りは進んでいる	さらに教務部と学生部が協力関係作りを時間をかけて進める
	・ 通学生への学生支援	ポストコロナを意識した全学生に対する統合的學生支援を実施する（A）				
	・ 多様な学生ニーズに応える学修支援	5	コイノニアによる共同体形成を推進する	全教員に分担して職員とともにコイノニアによる共同体形成を進めている	全教員で担任を分担し、職員も加わる形で一年を通じてコイノニアを行うことができた	各コイノニアの状況を調べ、共同体形成の内実を高めていく
	・ 学生生活（経済・精神的）支援体制充実	6	オンラインによる入学前教育を充実する	入学前教育と初年次教育を接続させるかたちで実施している	入学前教育のアンケートの結果、学ぶ意欲の強い学生がいることがわかった	学ぶ意欲の強い学生向けに、オプションとしてブックレビューの課題を用意する
	B. カリキュラム改革	7	総合神学科の初年次及び二年次教育を充実する	入学前教育の状況に基づいて、サポートが必要な学生を確認し、基礎演習はレベル別のクラス分けを行った	レベル別のクラスにすることで、学生の進度に応じた対応を実施したことは評価できる	3年次編入生が必修となっている「TCUスタンダード」の内容について検討する
・ 学部の学科再編（カリキュラム全体スリム化）	8	総合神学科の学生像に相応しい行事のあり方を検討する	5月に学内でスプリングリトリートを実施した。7月に夏期伝道チームを千葉県と茨城県の10教会に留学生含む学生教員63名を派遣した。10月には3年ぶりに外部の出店者や参加者を招いて対面でのシオン祭を開催した	コロナへの対応で様々な制限や変更があったが、その中でも最善の形式を模索し、実施できたことは評価できる	学生数減により委員会に関わる学生も減っているため、恒例となって行っていたプログラムを見直すことで負担を減らし、より効果的な行事のあり方を模索する	

(学)東京キリスト教学園 東京基督教大学 2022年度事業 報告・評価・改善

2023年5月30日理事会承認

・ 修士課程のコース見直し（カリキュラム全体スリム化）	9	総合神学科の学生像に相応しい教会実習のあり方を検討する	検討はできていない	未達である	来年度に行う
・ 日英提供プログラムの連動性強化	10	TCUポートフォリオの有効な活用を推進する	コイノニアにおいてTCUポートフォリオ記入を行い担任がフィードバックコメントを行うように周知している	教員によるフィードバックが浸透していない	夏にFDを行うなどTCUポートフォリオの活用について周知する。担任のフィードバックを学生が確認しやすいように通知機能を追加する
・ 学部初年次教育の充実	11	担任制を軸とした教職協働の学習支援体制を推進する	全教員が加わっての担任制を軸として学習支援体制をコイノニアで実施した	各コイノニアにおける担任の働きにはばらつきはある	各担任のもつ課題を調べ、担任制をより充実させるための研修を行う
・ 教会教職者カリキュラムの柔軟化検討	12	教会教職課程4年間の女子学生を支援する	2月に大学院女子学生と担当教職員の懇談会を開催した	教会教職前期課程の女子学生に向けたプログラムは実施できなかった	教会教職課程前期の女子学生も対象とし、学期に一度の支援プログラム実施する
・ 福祉専攻における全世代対応ケアワーカー・リーダー養成	13	学科再編後の学生像に相応しい通学生支援体制を検討する	通学生が大学キャンパスにくる機会にできるだけの支援を実施した	正規生は、ハイブリッド授業に関して原則教室授業を求めているが、通学生に関しては個々の状況により、オンラインで受けることを許可した	多様な経歴を持って学びを続ける通学生に対し、柔軟な履修を可能にするなど、きめ細かい支援を続ける
・ 国キ専攻生進路の多様化に対応したカリキュラム検討	14	学科再編・ウィズコロナを踏まえた寮教育のあり方を検討する	EAIの受け入れは昨年度から再開できたが、ダブルディグリーについてはバイオラ大学への連絡に回答がない状態である	バイオラ大学はEAI学生も送ってこず、こちらからの連絡にも答えがなく、本学の方の問題ではない	バイオラ大学とは総合神学科としての単位認定等を含めた規定の見直しを打診する。他大学とのダブルディグリー制度開拓の可能性を調べる
・ スタディーツアー充実	15	発達障がい学生の学修支援を充実する	特別なサポートが必要な学生については、保護者とも協力しながら、職員が定期的に課題の進捗等を確認している	職員との面談前に課題を自分で取り組むことを徹底することで学生に成長が見られたことは評価できる	職員が課題の内容について支援するのには限界があるため、特別学習支援の枠組みを提供した
・ ダブルディグリー・短期留学制度充実	16	サードカルチャーの背景をもつ学生の学修支援を充実する	特別なサポートが必要な学生については、保護者とも協力しながら、職員が定期的に課題の進捗等を確認しつつ、外部の支援担当者が具体的な学習支援を行った	全履修科目の課題を一通り諦めずに提出し単位を修得できたことから、外部の支援担当者によるサポートに一定の効果があったことは評価できる	特別学習支援の枠組みに入らなかった学生の支援について、学生支援を一元化した修学支援委員会で検討する
・ ACTS-ESカリキュラムの日本語教育充実	17	The Writing Centerの活動を推進する	The Writing Centerは、2022年8月から2023年3月31日の間、運営しなかった。その必要性や運営の仕方を評価するために活動を休止した	この間の英語による授業で、学生のライティングの質が低下していることに気づき、ライティングサポートの必要性を改めて感じた	The Writing Centerを再開し、教員と協力しながらThe Writing Centerの積極的な利用を促進する
・ 教会音楽専攻科のカリキュラム見直し	18	国籍を超えてお互いのニーズを理解し共同体形成を促進する	完全に対面授業に戻り、国際学生と日本人学生の「混合授業」やサークル活動等における国際交流を促進した。また、去年に続けて、グローバル・コネクションズというオンラインでの国際・異文化交流のイベント（6回）を開催した	グローバル・コネクションズは英語でのイベントを3回、日本語でのイベントを3回行い、数十カ国からアクセスされ、多くの参加者と楽しく有意義な交流を持つことができた。今年特に良かったのは、国際学生がチームを組み、2回ほどそのイベントを開催した。学生間のコミュニケーションに関しては、必要に応じて担任の先生や寮主事が間に入り、コミュニケーションの助けをした	グローバル・コネクションズの企画・運営は限られた教員によって行われてきたが、その負担は少し大きすぎて、持続可能な仕組みではないことが見えてきた。次年度は、このイベントの在り方や運営の仕方を考え直す必要がある
・ 学修成果測定・評価の検討と見直し	19	学科再編・ウィズコロナを踏まえた教育のためのFD・SDを実施する	学科再編またウィズコロナを踏まえたオンライン教育のために必要なFD・SDには取り組めた	学科再編またウィズコロナを踏まえたオンライン教育のために必要なFD・SDには取り組んだ	他にも課題があるため、この課題だけに今後もFD・SDを集中させることはできない
C. 教育組織の拡充		全学生に対する統合的学修支援を実施する (A)			
・ 教会教職養成課程3年制設置の検討	20	総合神学科の各専攻の履修モデルを整備する	教務部より各専攻の履修モデル案が学務会議に提示された	履修モデルは教務部より適宜学務会議に出されて検討をした	今後は履修モデルが妥当であるかを検証する必要がある
・ 学部の学科再編の検討	21	ウィズコロナを踏まえた大学院のカリキュラムを充実する	大学院で提供している科目のうち数科目をハイブリッド授業にして「どこでもTCU」大学院の科目として提供した。正規生として入学後、聴講料分の奨学金を支給するシステムを起ち上げた	順調に進められている	なし
・ 教員免許課程設置の検討	22	ウィズコロナを踏まえた音楽専攻科のカリキュラムを充実する			
・ 研究科の通信教育課程の継続調査	23	英語トラックの学生の日本語教育を充実する	初級の文字・語彙は目標のN5に到達、中級は教科書を変えたためN5レベルを繰り返す。多読は春学期は上級学年も受講できたが、時間割のためか、秋・冬学期は正規生の受講が減少。いずれも意欲のない学生の対応に苦慮している	どのクラスも日本語環境・対面のメリットを生かし、よく学んだ	初級（N5）・中級（N4）の流れを崩さないよう気をつける。多読の継続した受講を励ます
・ 保育士資格取得特別応援コース開始		学修成果測定・評価方法を検討・実施する (B)			

(学)東京キリスト教学園 東京基督教大学 2022年度事業 報告・評価・改善

2023年5月30日理事会承認

	福祉専攻科の設置検討	24	全学的に学生情報システムを活用する体制を整備する	春入学生・秋入学生・教職員の年間通したシステムの活用が行われた。2022年度は成績表示、履修確認、補助金に関わるデータのグラフ化について改善を行った	各職員の業務から、改善すべき内容を情報共有し、随時改善することができた	教務部全体の業務が一部効率化されたが、今後は教務以外の関係部署とも調整しながらシステムを改善し、全体の業務効率化を図る。特に学生カルテの実装について進める。2023年度はウェブ出願システムの実装について優先的に実施する
		25	ハイブリッド授業のための体制・環境を整備する	「どこでもTCU」の提供科目(科目等履修・聴講)を中心にハイブリッド授業のための環境を整備した	ハイブリッド授業での開講科目が少なく、またCAなどのサポート体制も充実していて、ハイブリッド授業を問題なく行えたことは評価できる	「どこでもTCU」や大学院のオンラインプログラムが開始されることもあり、より充実した授業サポート体制を整える
		26	授業改善に資する授業評価アンケートを実施する	教務システムを活用して授業評価アンケートを実施した	授業評価アンケートを実施できたことは評価できる	次年度は、授業評価アンケートの結果を学生会と共有し、学生の意見を授業改善に生かす。授業評価アンケートの経時変化につてグラフ化する
		定員増加のための施策を検討・実施する (C)				
		27	教員免許課程・資格取得コースの実施方法・時期を検討する	検討できていない	未達である	在学中に保育士試験(9科目)に合格すれば卒業時に保育士資格を取得できるため、資格取得コース設置は難しくても、資格試験受験者を応援する方法を検討する
		28	どこでもTCUにおける履修証明プログラムを準備する	「どこでもTCU」における履修証明プログラムの準備を行った	「どこでもTCU」における履修証明プログラムの準備をすることができた	「どこでもTCU」を通して、新たに学部で5コース、院で3コースを設け、2023年度より運用を開始する
		29	オンラインで学位取得できる大学院の準備をする	オンラインで学位取得できる修士コースを来年度開設することができた	オンラインでの修士コースを素早く開設できたことは大変良かった	なし
2 学生募集	1 訪問目的の明確化	1	オンラインと対面の両面で教会訪問を行う	対面を中心に教会訪問を実施することができた。訪問数61件。11月には2年目となるTCUデーを実施し、2教会に学生と教員によるチームで訪問した。	昨年と比較して微増したことは評価できる。少しずつ対面での教会訪問ができるようになってきたが、大学から依頼しての訪問はできなかった。2年目のTCUデーで学生を派遣することができた。キャンプ訪問は昨年度から6件増だった	次年度は大学からの提案による教会訪問を増やし、戦略を立てて取り組む。3年目となるTCUデーを実施する
	2 国外：教会・宣教団体等とのネットワーク拡大	2	海外の宣教団体、教会、在外卒業生との関係を深化、拡大させる	韓国のHapdong大学との連携協定と締結。Hanpdong大学の学生チーム、ドンジャグ教会の学生チームがそれぞれ学校見学に来た。	韓国からの2チームを受け入れることができた。uniTed2022では30のキリスト教団体をキャンパスに招くことができた	次年度もuniTed2023を開催し、多くの関係団体を招く。朝岡理事長の2度の訪米(TCUF関係の教会等訪問、JCFN主催のイクイパーズカンファレンス)で関係性を深める
	3 国内：ネットワーク拡大	3	支援団体、協力団体、卒業生との関係を深化、拡大させる	hi-b.a.との共催による一泊型OCを実施。日本基督教団の牧師養成検討委員会との会合(2回)、同窓会・OCC首都圏宣教との共催によるuniTed2022を開催し、多くのキリスト教団体がブースを出展した。キャンプ訪問は24件だった	日本基督教団との会合を重ねることができ今後の教会教職課程の募集に期待できることは評価できる。理事の呼びかけによるuniTed2022開催できたことで、継続的に学生募集への好影響が望まれる	次年度も継続的に会合を重ねる
	4 中高生・青年宣教団体との包括協定先増加	4	新規包括協定締結先をリストし関係性を構築する	中高生・青年宣教団体との新規の包括協定締結はなかった。	中高生・青年宣教団体とは既に協定を締結したり、連携を進めたりしているため、新たな方策は考えにくい	新規の締結とともに、既に締結した団体との関係性の継続と深化、学生募集への確実な結実をめざす具体的な取り組みや対話の機会を設ける
	5 オープンキャンパス参加者数増加	5	キャンパスとオンライン両方のオープンキャンパスを実施する	オープンキャンパスを年7回(来場型6回・オンライン1回)開催し、他に個別学校見学を行い、合計で90名の参加者があった	昨年度と比較して参加者は微増したが、OC参加者からの出願者の比率は、1年次入学対象者で12%、編入対象者で13%と低かった。OCに参加しても出願につながりにくい状況となっている	OC参加者が出願へとつながるよう、プログラムやフォローアップ体制を改善する
	6 資料請求者数増加	6	ウェブサイトでの広報活動を継続的に改善強化する	学生広報スタッフによるSNS、ブログの発信頻度を高めた。位置情報を活用したインターネット広告を夏のオープンキャンパスの訴求に活用した。	資料請求者は258件。昨年度175件。昨対比+83件。資料請求は大幅に増加しているが、出願に結びついていない	ウェブサイトのリニューアルする。資料請求者が出願へとつながるようフォローアップ体制を改善する
	7 入学・収容定員充足	7	入学者定員を充たし、収容定員充足を目指す	・総合神学科1年次16名(春11+秋5) ・編入学18名(春3年次15、秋2年次1、秋3年次2) ・大学院修士課程23名 ・大学院博士課程1名 ・教会音楽専攻科0名	1年次入学定員に対する充足率は48%と極めて低い。女子学生と「国際」に関心のある学生、首都圏近郊の学生が減少の傾向がある。3年次編入学は同107%と編入学定員を超えることができた。大学院修士課程も内部進学者数が多かったことで定員を超えることができた	学生募集活動の見直しとともに、カリキュラム、プログラム、寮や学生支援を含めて、受験生にとって魅力ある大学となるための改善が必要である。総合神学科の組織名称についても検討する
	8 アドミッションポリシーに基づく入試改革	8	入試制度の適切性を検証し必要に応じて改善する。入試体制の見直しを検討する	総合型選抜、オンライン総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜を実施した	各選抜においてミスなく入試を行うことができた	コロナ5類相当移行に伴い、オンライン入試を一部を除いて廃止する

(学)東京キリスト教学園 東京基督教大学 2022年度事業 報告・評価・改善

2023年5月30日理事会承認

	9	全教職員による教会訪問	9	オンラインと対面の両面での訪問に取り組む	対面を中心に教会訪問を実施することができた。訪問数61件	昨年と比較して微増したことは評価できる。少しずつ対面での教会訪問ができるようになってきたが、大学から依頼しての訪問はできなかった	次年度は大学からの提案による教会訪問を増やし、戦略を立てて取り組む
	10	キリスト教学校との共同取り組み推進	10	キリスト教学校との共同取り組みを推進強化する	安積氏講演ブックレットを作成し配付。玉川聖学院高キャンで朝岡理事長が奉仕。11月に国際教養科目で森田先生が授業を担当。女子聖学院で齋藤先生がチャペル奉仕（オンライン）。山口学長が玉川聖学院、女子聖学院の卒業礼拝で奉仕。3月新島学園English Global Campをオンラインで共催	キャンプや授業など、TCUの霊性、学びの面を高校生に体験してもらい機会が増えたことは評価できる	キリスト教主義高校やチャーチスクールにおける出張講義の機会を増やすこと、キャンパスに招く機会も増やしていく
	11	受験生目線のコミュニケーション	11	SNS等を通じて受験生の益となるコミュニケーションを行う	学生広報スタッフによるSNS、ブログの発信頻度を高めた	ブログ、SNSを学生スタッフが中心になって運営し、全学生からも素材提供を呼び掛ける取り組みができ、多くの学生を広報活動に巻き込むことができた	これまでの取組を継続するとともに、学生アンバサダーを起用した発信、学生による広報誌STATIONによる発信も行う
	12	多様（留学生・社会人等）な志願者を想定した募集活動	12	ウェブサイトでの広報活動を継続的に改善強化する	英語サイトでの3Stepsの取り組みを継続している。Global Connectionsを行い累計167名参加した	出願者数、面談者数が増加していることは評価できる	秋入学・編入学生の増をめざし、継続して取り組む
	13	人の成長に焦点を当てた広報活動	13	動画・紙媒体で学生の成長する姿を訴求する	新入生の証動画、新しい学生生活動画、卒業面談動画を制作しYouTubeにて公開	学生の成長する姿として、初めて卒業面談時の学生の声を動画にまとめることができた	広報と学生募集の状況を見ながら必要な動画コンテンツを制作する
	14	保護者の説得、阻害要因（進路・経済）を解決する広報活動	14	各調査結果を基に広報活動を行う	グローバル神学推進におけるキャリア支援をアピールした。11月オープンキャンパスで保護者懇談会を行った	11月のオープンキャンパスにおいて保護者懇談会を行い高い評価を受けた	オープンキャンパスでの保護者懇談会を継続する
3 財務・キャンパス整備	1	教育・学生支援充実のための改革実施	1	資金の収支の改善に向けた施策の立案と実行⑤ 収支均衡到達年度2027年度に向けて、資金流出を抑制し、経営指標に基づく財務管理に努め、財務改善実行を進める	2027年度の資金収支均衡に向けたシミュレーションを、特に実態に即した学生数推移と人件費推移を中心に進めた。3月14日の理事会で、2023年度予算案資料とともに共有した	取り組みを進めたことは評価できるが、喫緊の課題にしてはスピード感が伴っていない	シミュレーションに基づく改革プラン（理事長素案）を7月理事会に向けて作成する
	2	学納金収入増加	2	学納金収入現員180名分を目指す。「どこでもTCU」などのオンライン教育を推進し、学納金収入増加につなげる	・学納金収入は1億8,093万円で、学生数180名相当分となった ・このうち「どこでもTCU」を含む聴講料は364万円（予算対比121%）。また、実験実習料予算のうちEAI（短期留学生受入プログラム）はで1,738万円であった	・いずれも予算額には未達であったが、当初計画をほぼ達成できたことは評価できる ・特に昨年度に対して退学者が抑えられたこと、短期留学生受け入れが本格的に再開できたことで収入増につながったことは評価できる	学納金は収入の基本であり、さらに現員増、聴講生・科目等履修生・EAI生受け入れ増により、収入増加に努める
	3	定員増の認可申請	3	学生定員充足と増加を最優先する	(2. 学生募集参照)	(2. 学生募集参照)	(2. 学生募集参照)
	4	寄付金収入増	4	寄付金収入9,000万円を目標とする。支援会活動の充実とともに教会・企業などへのきめ細やかなアプローチを続ける。冠奨学金・遺贈の増加を目指す	・寄付金は7,649万円（予算対比85.0%、昨年対比92.1%）、件数は5,296件（昨年実績5,211件）、寄付金者数は1,334（昨年実績,244）であった。寄付金者数は目標1,300名を超えることができた。個人は増、教会団体は減となった ・全国展開中の各地区支援会の活発な活動、TCUdayなどにより支援者の拡大が図られた ・遺贈イベントを開催し、アピールに努めた	・寄付金額は予算に未達であったことは課題だが、寄付者数が過去最高の人数になったことは、支援者の広がりを示すものとして評価できる ・過去三年続いた企業からの大口寄付が得られない中で、7,649万円の寄付が与えられたことは確実な寄付の積み上げの結果として評価できる	予算に未達であったことを重く受け止め、新規寄付者の開拓、企業や海外へのアプローチ、冠奨学金と遺贈の開拓について検討、実施する
	5	適切な人件費・人件費依存率維持	5	次期人事計画を早急に立案し、それに基づく適切な人件費の割合を設定する。今年度は人件費依存率180%を目安とする	退職職員補充に伴う新規職員の採用によるシフト、教員定年退職などにより、人件費の圧縮が進められた	必要な人員配置とともに、人件費依存率が前年度より圧縮された（232.2%から192.1%）ことは評価できるが、目安達成には至らず、健全な指標には未だに程遠い	将来を見据えた詳細な人事計画を早急に策定し、人件費試算を進める
	6	人件費の見直し検討	6	次期人事計画を早急に立案し、年次毎の人件費支出の試算を行う	人件費試算に着手した。現段階の数字は2028年度まで、教職員退職の「自然減」を反映したものである	取り組みを進めたことは評価できるが、喫緊の課題にしてはスピード感が伴っていない	大学の方向性と収支バランスを踏まえた2028年度までの教職員人事計画の検討・策定を早急に行い、適切な人件費支出を算出する
	7	奨学費支出の再検討	7	学生支援に支障のないように留意しつつ、冠奨学金等の活用により奨学金支出のうち、3,000万円以下の持ち出しを実行する	・奨学金委員会により、各種奨学金の給付を行った ・各種冠奨学金の見直し、整理を行った	・奨学金「3,000万円以下の持ち出しを実行する」に対して、1,909万円となったことは評価できる ・長年の懸案であった旧貸与奨学金の未回収分の回収が果たされたことは評価できる	・奨学金支出の適切な執行と共に持ち出し分の精査を進める ・新規冠奨学金の獲得に努める
	8	資金の収支均衡実現					

(学)東京キリスト教学園 東京基督教大学 2022年度事業 報告・評価・改善

2023年5月30日理事会承認

	9	付随事業・収益事業の検討	8	既存の事業収入増加を図るとともに、新規収益事業の立ち上げを実施する	・「どこでもTCUエクステンション」は受講者391件、収入272万円であった（予算172万円、予算対比158.1%） ・食堂はZENSUYOKU FOOD株式会社への委託とした。2023年度も継続とした ・新規収益事業の立ち上げには至らなかった	・「どこでもTCUエクステンション」が順調に推移していることは評価できる ・食堂の外部委託によるコスト面については、検証し2023年度予算に反映した	・「どこでもTCUエクステンション」について、さらに受講生を新規入学生や支援者獲得につなげていく ・食堂外部委託の進捗を注視し、より良い運営を進める ・新規収益事業については、検討を継続する	
	10	施設・設備の計画的な補修	9	修繕計画を精査し、必要な予算措置を行う	大規模修繕計画立案のための調査を依頼する業者を選定し、見積書に基づく予算を2023年度に計上した	取り組みを進めたことは評価できる	2023年度前半に調査を実施し、それに基づく大規模修繕計画立案を行う	
	11	学修のためのウェブ・システム拡充						
4 ガバナンスとマネジメント	1	あるべき教員・職員・理事像検討し明文化	1	早急に検討を開始し、明文化を進める	ガバナンスコードを策定した	ガバナンスコード策定により、明文化を進めることができたことは評価できる	各種規程、ガバナンスコード、教員ハンドブックなど示された内容の実質化を進める必要がある	
	2	教職協働による学生支援体制構築	2	コイノニアと学生情報システムを連携させトータルな学生支援を教職協働で行う	学部長のもとに学生支援タスクフォースを設け、コイノニアと学生支援の連携に努めた	学生支援の担当が教務部と学生部に分散されている	修学支援委員会に統一しての学生支援体制を安定化させる	
	3	PDCAサイクルの有効化	3	通常の月次事業報告をPDCAサイクルを意識して行う	月次事業報告提出先の整理を行った	PDCAサイクルを意識した月次事業報告は行われている	報告のための報告にならないようにさらに改善を進める	
	4	内部質保証システム確立	4	内部質保証推進委員会(大学運営会議)が統括して内部質保証に取り組む	大学運営会議の統括による内部質保証の実現に取り組んだ	大学運営会議を中心とした内部質保証体制が整いつつある	内部質保証への取り組みがに慣れて定常化させる	
	5	意思決定機関のシンプル・迅速化	5	事前準備と時後のフォローを適切に行うことにより、大学運営会議、常任理事会の双方で迅速かつ適切な判断ができる体制を整える	各会議の事前の議案準備、資料の共有、事後の報告や継続課題への対応を行った	それぞれの会議体に応じた事務組織による準備対応が進められていることは評価できる	さらなる会議の充実のために、議案準備や資料作成の精度を上げる必要がある	
	6	情報共有体制整備	6	迅速で確実な情報共有のためサイボウズ等の有効利用をさらに進める	グループウェア（サイボウズ、teams）の活用が定着化している	各会議体からの報告、各種告知、情報や意見の集約や共有に有効活用することができた	ツールの活用とともに、対面を含めて重要な情報共有やコミュニケーションの活性化が必要である	
	7	「コンセプト」実質化	7	大学改革コンセプトの実質化として「グローバル神学推進タスクフォース」を設置する	「グローバル神学タスクフォース」が活動を開始し、コンセプト実質化に努めた	第四期中期計画の全体方針の「グローバル神学の推進」に先鞭をつける働きが指導したことは評価できる	「グローバル神学」についての全学的な理解の深化と浸透をさらに進める必要がある	
	8	中期計画、神の国に仕えるプロジェクト、30周年行事推進体制整備	8	大学運営会議によって第三期中期計画を評価し、第四期中期計画策定を進める。第二次神の国に仕えるプロジェクトを常任理事会・大学運営会議のもとで継続する	第三期中期計画の評価を踏まえつつ、第四期中期計画と、それに基づく新年度事業計画・予算の策定を行った	学長のもと、各推進責任者を中心に第四期中期計画を策定することができた	定期的な振り返りと評価、進捗の推進、確認を適宜行う体制を整える必要がある	
	9	理事長・学長・学部長等役職者の職務権限明確化	9	各役職者の職務権限に関わる規程の改正、必要に応じて新設を行う	学内組織の見直しとともに、新たな役職として「副理事長」、「事務局長」、「副事務局長」などを設けた	・副理事長の規程を設けて、新たな役職を置くことができた ・ガバナンスコード策定に基づき、各役職者の職務権限の明確化を進めることができた	必要に応じて役職者の職務内容の見直しなどを継続して進めていく	
	10	キリスト教全人格教育に全学を挙げて関わるプログラム実施	10	コイノニアとクリスチャンライフ・フォーメーションの連携を安定化させる	学期の最初と最後のコイノニアにて、ポートフォリオの記入を促し、クリスチャンライフ・フォーメーションとの連携に努めた	新たな取り組みであるために、安定した取り組みとはなっていない	各コイノニアでの執行状況を調べつつ、クリスチャンライフ・フォーメーションとの連携を安定化させる	
	11	会議の見直し	11	各会議体の目的、権限、構成に即した会議の効率化・活性化のための研修を実施する	会議の構成員の見直し、議案の整理など、意思決定のシンプル・迅速化にあわせて実施した	会議のあり方に特化した研修は未実施であった	会議のあり方を含め、組織強化を目的とした研修企画を進める	
	12	教授会の役割の見直し	12	教授会での教員同士の意見交換の機会をより充実させる	教授会での審議事項に余裕がある時に、学長主導で教員同士の意見交換の機会を作っている	教授会が教員として意見を交換する場であるとの意識が共有されてきた	教員としての意見を交換する場としての教授会のイメージをさらに定着させる	
	13	FD・SDの充実	13	オンライン教育等喫緊の課題に対応するFD・SDを実施する	オンライン教育等喫緊の課題に対応するFD・SDを実施した	今年度はオンライン教育の充実のためのFD・SDに特化することができた	今後は危機対応のための組織改善など他の必要のためのFD・SDを充実させる	
	14	理事会機能向上	14	経営責任を担う理事会と、経営の主体となる常任理事会の責任を明確化し、迅速な経営判断ができる体制を整える	対面での理事会の再開により、重要課題について十分に時間をかけた審議を行い、迅速な経営判断と実行を進めた	・資金運用における判断など、重要な経営判断に必要なタイミングで行うことができた ・学園の現状と課題を認識し、今後のあり方についての本質的な議論を重ねることができた	経営主体となる常任理事会の機能を強化し、それを支える事務局体制の強化を進めるべく、必要な措置を行う	
	15	監査制度の充実	15	監事の役割の重要性に鑑み、財務監査、業務監査、研究関係の監査を補佐する体制を検討する	・新たに1名の監事を選任し、3名体制とする準備を行った ・懸案であった「監事監査規程」の作成準備を行った	・監事の重要性に鑑み、ふさわしい候補者を得ることができた ・ガバナンスコード策定を受け、「監事監査規程」を整えることができた	監事の研修、監査計画立案などを通して、監査体制の充実をはかる	
				16	顧問の任期、人選など相応しいあり方を採用する	顧問1名の退任、1名の新任を行った	あらためて顧問のあり方を検討し、ふさわしい人選を行うことができた	しばらく休止であった顧問会の再開に向け、会合の持ち方などをさらに検討する
16	有効な情報共有							

	17	大学認証評価準備	17	実施した自己点検・自己評価に基づき大学基準協会による認証評価を受ける	大学基準協会による認証評価を受け、結果「適合」の評価を得た	「学生支援」(コイノニア)、「社会連携」(グローバル神学)に「長所」の評価を得ることができた	改善課題となった「内部室保証」、是正勧告となった「財務」は早急に改善すべき課題として取り組みを進める
5 研究	1	外部資金の継続的な導入	1	①年間5件以上の外部研究費への申請を行う ②研究支援センターによる外部研究費関連の情報共有、申請の促進を行う	①外部研究費に3件の申請を行った ②学内ネット・メール・掲示・対面等により情報提供と申請促進を行った	①継続的に申請を行う研究者が複数いることは評価できるが、新たな申請者が増えず、目標件数を達成できなかったことは課題である ②従来に増して研究助成等の情報提供を行っていることは評価できる	学内ネット・メール・掲示・対面等による情報提供と申請促進を継続して行う。教授会等の会合で申請を促す
	2	学内研究体制強化	2	①研究支援センターを中心とした研究支援体制の充実を図る ②研究支援センター専用ウェブサイトの開設と情報共有を促進する	①研究支援センターによる研究支援の充実をはかった。また初めての出版助成申請の採択を行った ②未着手となった	①研究支援センターの研究支援チームによる研究支援業務が定着していることは評価できる ②担当職員の多忙等で研究関連専用ウェブサイトの作成に着手できなかったことは課題である	②次年度予定している大学ウェブサイトのリニューアルに合わせて、専用ページを開設する
	3	教会に寄与する研究推進と成果の公開	3	①キリスト教葬制文化研究会を継続し、キリスト教葬儀に関わる人材育成プログラムを継続し検証する(国際宣教センター) ②神の国研究プロジェクトを継続する信徒の神学研究会、キリスト教と福祉研究会(共立基督教研究所・国際宣教センター)、賀川豊彦シンポジウム(公共福祉研究センター)を通して議論を深める	①キリスト教葬制文化研究会を3回開催(7/25、10/31、2/27)した(島菌進著『ともに悲嘆を生きるーグリーフケアの歴史と文化』の読書会、福島原発問題、日本文化における悼みについての発表)。夏にキリスト教葬儀に関するセミナーを福島で開催した(キリスト教葬儀ライフワークス社との協同) ②信徒の神学フォーラムを1回、キリスト教公共福祉研究会を3回(映画上映会を含む)を開催した。またワーカーズコープとの共催により「『労働者協同組合法』法制化記念フォーラム in 印西(9/9 本学チャペル)を開催した。賀川豊彦シンポジウムは、今年度は未開催となった	①コンスタントにキリスト教葬制文化研究会を開くことができた。また、キリスト教葬儀ライフワークス社との協同で葬儀に関するセミナーを福島で開催することを通し、地域教会に貢献することができた ②ワーカーズコープとの共催によるフォーラムを開催することを通し、印西市の様々な団体とつながることができた意義は大きい	①キリスト教葬制文化研究会は2022年度で終了し、死生観に焦点を合わせた研究会としていく ②公共福祉センター(旧公共福祉研究センター)が国際宣教センター(FCC)に移管されたことを受け、今後の具体的な働きを模索していくことが次年度の課題である
	4	国内外の神学教育・宣教教育機関との連携と研究交流促進	4	日本宣教会、アジア宣教会、ATA加盟校の宣教研究所、その他との情報交換・交流を促進する	・3年に一度開催されるATA総会(マレーシア)に出席した(9/26-9/30)。テーマは、“The Digital Turn in Theological Education: Impact, Opportunities and Challenges”であった ・ATA学位認証審査団の一員として、神戸ルーテル神学校とAGST(Asia Graduate School of Theology)の認証審査に携わった(10/24-10/27) ・AGST国際協議会(タイ)に出席し、各国の代表者と交流・意見交換を行った(2/13-2/17) ・日本宣教会の学会誌『宣教学ジャーナル』の編集委員として活動した ・2024年に韓国・ソウルで開催される第4回ローザンヌ世界宣教会議の参加者ノミネートを行った ・ATA/J理事長、ATA/J総主事、AGST/J校長が来校し、本学の学長、理事長、研究会委員長、国際宣教センター長とで今後の協力関係について協議した(3/29)	ATA/JとAGST/Jの代表者と会合を持ち、今後の協力関係について確認できたことは非常に大きい	ATA/JとAGST/Jとの具体的な関係の深まりが今後の課題である。学内においてもATAとの関りの意義を共有していきたい。3年に一度のATA総会に教員を派遣することなども検討していきたい。次年度からは2名がATAとの窓口となる予定である
	5	協同研究、シンポジウム・学会の実施・受入れ	5	研究支援センターを中心に共同研究等の促進を図る	学内研究助成では、本中期計画期間中3件の共同研究が実施された。コロナ禍もあり、シンポジウム・学会の受入れはあまり進めることができなかったが、外部団体との共同によるシンポジウム2件を本学で開催した。2023年度に本学を会場に1件の学会学術大会の開催する予定	コロナ禍においても、計画を進めることが出来たことは評価できる	今後も機会を捉えて協同研究、シンポジウム・学会の実施・受入れに努めていく
6	建学の精神に関わる出版検討						
	7	信徒神学の研究	6	国際宣教センター・共立基督教研究所の合同により研究会を行う	2022年度は後半のみとなったが有意義な研究会を開催。2年間で3回の研究会を開催した	回数は1回であったが、丁寧に準備された研究発表の機会を設けることができた	信徒の神学フォーラムは、2023年度以降国際宣教センターの研究活動として継続し、本学の教育活動と連携した研究を継続する
6 教会と社会	1	「教会や地域との関わりシステム」構築	1	新たな学内推進組織とその活動を軌道に乗せる	「グローバル神学推進」に関する教職員による会合を行なった	社会連携・貢献に関する教職員全体での会合は10年以上開かれておらず、開催は評価できる	なし
	2-1	研究成果の共有・還元		(5. 研究参照)			
	2-2	様々な教育機関と交流・連携		(5. 研究参照)			

(学)東京キリスト教学園 東京基督教大学 2022年度事業 報告・評価・改善

2023年5月30日理事会承認

地域と共に	3-1	地域社会の福祉活動向上	2	介護福祉士実務者研修を実施する	4月期、5月期の講座を開講した。(受講生は4月期6名、5月期4名の合計10名)	スクーリングも無事実施し、すべての受講生が受講を終了した。例年より若干多い受講生を確保できた点は評価できる	さらなる受講生の獲得を目指すとともに、運営体制の省力化等の見直しにも取り組む	
	3-2	文化芸術振興	3	コロナウイルスの感染状況を踏まえ、対策本部との連携を図りながら、地域社会に開かれたコンサートや幅広い世代に向けた公開講座を提供できるよう準備する	5月にパイプオルガンコンサート、6月～11月に計5回の公開講座、11月に世界的オルガニストを迎えたパイプオルガンコンサート、12月にクリスマスコンサートを開催	コンサート・講座ともに対面開催と後日配信の両方を提供でき、幅広く多くの方々に喜んでいただけたことは評価できる	引き続き、コロナの感染状況を注視しつつ、対策本部との連携を図りながらコンサート・講座の企画・運営を行う。オンデマンド配信の活用も続けてゆく	
	3-3	国際交流寄与	4	市民団体等と協力し地域の国際交流を推進する	加盟市民団体と情報交換を継続して、地域イベントへの留学生参加を呼び掛けた	感染対策に留意しながらではあるが、学外活動の推奨は評価できる	なし	
	4-1	TCU支援会活動充実	5	支援センターが核となり、各地区のTCU支援会との相互支援活動を踏まえ、支援会活動を充実する	引き続き、各地区・教会等の要望に応え、地区学園デーや教員派遣による教会礼拝奉仕等を行った。オンラインを併用した	各地区・教会との相互支援活動を実施できており評価できる。地区でのサテライト式開催や地区間のコラボ企画も促しており、実際に効果的である	オンラインもふさわしく併用しつつ、さまざまな形式で、相互支援活動をさらに進める	
	4-2	支援教会・支援団体拡大	6	支援教会・支援団体との連携強化を図る。また拡大を進める	理事長・学園長、学長を中心に、支援教会・支援団体とのコミュニケーションを続けた。また、拡大について心がけた	継続的なコミュニケーションを図れていることは評価できる。ただし支援団体・支援教会の明確な増は具体的にはなかった	相互に有意義な連携強化を深める。また拡大について具体的に計画を進める	
	5	教会との連携	7	教会との連携について、同窓会・支援団体と協力して教会へ働きかける	同窓会と支援会との協力・連携によって、情報を発信する等、教会への働きかけを行った。諸教会初め支援者にTCUを覚え祈り支えていただく目的のTCUデーを11月に行なった。また、支援団体を通し教会へ大学ウェブサイトの情報を共有する等の取り組みを行った	TCUデーは2年目となり、定着に向け取り組めたことは評価できる。また同窓会副会長が支援会副会長および支援センター会議のメンバーを務め、協力体制を相互で積極的に進めていることは評価できる	協力と働きかけについて、よりふさわしく積極的に取り組む	
	6	ケアチャーチ関東圏外へ拡大、教会の福祉への取組支援						
	7	各分野での継続教育提供	8	各分野における継続教育提供を支援する	「どこでもTCU」における継続教育提供が3年目を迎え、「どこでもTCUエクステンション」は5学期を終えた。教会音楽分野の継続教育は、キャンパス・北海道で実施した	オンライン教育について、合同で広報誌を作成する等により支出を抑えつつ広報活動を展開したことは評価できる	なし	
	8	クロスメディアによる継続教育提供	(1. 教育・学生支援参照)					
	9	履修証明プログラムの充実・発展	9	2021年度から始まったオンライン・ラーニング・プログラム「どこでもTCU」の提供内容やオンライン受講方法を改善する	2名に受講証明書を発行した。また、受講者から2名が修士課程に入学した	受講アンケートの回答から視聴を確認した上で受講証明書を発行する事ができた。また、受講者から正規学生へ結びついた事は評価できる	なし	
	10	施設の有効利用、関係団体等への貸し出し	10	貸出について、コロナウイルス感染状況を鑑み、大学の方針に沿って対応する	コロナ対策の方針に沿って施設使用の貸出は積極的には行わなかったが、方針が緩和されたことに伴い、3/21(火)にチャペルでの結婚式の貸出を行った	コロナ感染拡大防止に努めつつも、施設の貸出を実施できたことは良かった	今後も、コロナの収束具合を注視しながら、施設貸出を行っていく	
	11	他のキリスト教教育機関との連携し、キリスト教教育の進展に協力	(2. 学生募集参照)					
	12	学生・教職員：地域社会との積極的な交流・協力・取り組み評価						
13	学生・教職員：学外ボランティア活動推進	11	学内ボランティア推進を継続する	グローバル神学の推進タスクフォースにて学生への学外ボランティア・地域交流の呼びかけを行い、学生・教職員の参加があった	定期的な取り組みとなったことは評価できる	なし		
		12	SDG s の取り組み検討を継続する	取組がなかった	なし	第4期中期計画期中においてグローバル神学推進を中心に取り組みを検討・実施する		